



イラスト／平澤朋子

わたしの原風景

20

富安陽子

とみやす

ようこ／児童文学作家

私にはいくつもの原風景があります。始まりは一九六二年のカナダの夜。三歳の私は父と母と共に、日本からはるばる船と飛行機と汽車を乗り継いで、トロントのホテルに辿り着きました。戦後初の交換留学生として、カナダに都市計画を学びに行くことになった父に連れられ、家族で海を渡ったのです。遠い異国のホテルで、明かりの灯る廊下に置かれた、自分の背丈ほどもあるでっかいトランクの陰から、父が開けたドアの向こうの暗い部屋を不思議な気持ちで見つめている。それが人生最初の記憶です。父がお世話になることになった、マクリンさんというトロントの都市計画事務所の社長さんのお宅の庭には、森や丘や小川があって、野生のリスやスカンクやウサギが住んでいました。その広い広い公園のような庭を、マクリン家の子ども達と一緒に走り回って遊んだ事や、避暑地の湖で釣りをした事や、氷の張った池でスケートをしていて母が足を骨折してしまった事や……それから、それから、町までクリスマスマスパレードを見に行った日、余りの寒さにみんながポップコーンみたいにジャンプして体を温めていたのがおかしかった事なんかを、今でも遠い夢の中の出来事のように切れ切れに思い出します。

五歳で日本に帰ってから、私はずいぶんいろいろな町に住みました。大きな柿の木の生えていた東京の家、大阪に引っ越して初めて住んだ池田という町の、レンジ畑のまん中の空色のアパート、万博の時には親戚や友人がたくさん泊まりに来た千里ニュータウンの借家、六年生の夏休みに引っ越し、中学、高校の思春期を過ごした北摂の山間の町のタウンハウス……。

あの頃は、引っ越しの度に仲良しの友だちや住み慣れた町と別れなくてはならないのが、悲しくてたまらなかったのですが、今になってみるとそのお陰で、たくさん原風景を持てたのは幸せだった気がします。その一つひとつの場所の記憶が私の中に物語を呼び覚まし、物語の世界を支えてくれている気がするからです。